

白居易「任氏行」考

静永, 健
九州大学大学院人文科学研究院文学部門 : 助教授 : 中国文学

<https://doi.org/10.15017/3631>

出版情報 : 文學研究. 104, pp.35-61, 2007-03-01. 九州大学大学院人文科学研究院
バージョン :
権利関係 :

白居易「任氏行」考

静 永 健

一 古社に棲む妖狐

白居易の親友元稹が江陵府（いまの湖北省荊州市）の士曹参軍に左遷されたのは、唐の元和五年（八一〇）暮春三月のことであった。

都長安から荊州に至る失意の道中であつて、元稹は、その心境を十七首の古体詩に綴っている。みずからの潔白を信じ、士大夫として経世済民への揺るぎない「ところざし」を開陳したものである。

果たしてその詩篇は、都にいたる白居易たちにも深い感銘を与えた。^①左遷の憂鬱に意気消沈することなく、あくまでも前向きに、たくましく自分の人生を生きてゆこうとする彼の姿勢に敬服したのである。この十七首が、今に伝わる元稹の詩文集の全ての版本において、まずその第一巻冒頭を飾っている所以である。

その第五首、「古き社^{やしろ}」と題される作品は、鎮守の森に巣くう「妖狐」が天罰によつて退治されるという寓話である。以下、本稿が問題とするのは、元稹その人についてではなく、中国唐代に言い伝えられていた狐伝説とそれに関する文学作品についてであるが、まずは、この一篇を読むことから本稿の考察を始めたい。

古社

元稹

古社基陟在 人散社不神
 惟有空心樹 妖狐藏魅人
 狐惑意顛倒 臊腥不復聞
 丘墳變城郭 花草仍荊榛
 良田千萬頃 占作天荒田
 主人議芟斫 怪見不敢前
 那言空山燒 夜隨風馬奔
 飛聲鼓聲震 高焰旗幟翻
 逡巡荆棘盡 狐兔無子孫
 狐死魅人醒 煙消壇壝存
 繞舊田地 給授有等倫
 農收村落盛 社樹新團圓
 社公千萬歲 永保村中民

古社 基陟在るも、人散じて 社 神あらず。
 惟だ有り 空心の樹、妖狐 藏れて人を魅はす。
 狐惑されて 意は顛倒し、臊腥すら復た聞はず。
 丘墳は 城郭に變じ、花草は 仍ほ荊榛となる。
 良田 千万頃なりしが、占されて天荒の田と作せり。
 主人 芟斫を議するも、怪見はれて 敢へて前まず。
 那言 空山に焼おこり、夜には風馬を随へて奔る。
 飛聲 鼓聲のごとく震ひ、高焰 旗幟のごとく翻る。
 逡巡 荆棘尽き、狐兔 子孫無し。
 狐死して 魅人は醒め、煙消え 壇壝存す。
 壇を繞る 旧田地、給授するに等倫有り。
 農收あがり 村落は盛んに、社樹 新たに団円せり。
 社公 千万歳、永く村中の民を保ちたまえ。

『元稹集』卷一、作品番号〇〇〇五⁽²⁾

〔梗概〕農民たちが逃散し、廃村となった村社の霊木に狐が棲みつき、やがて近隣の村びとたちを次々と幻惑のどかな田園風景が、一転して荒れ果てた曠野となってしまった。村主は困り果て、霊木を切り倒そうとするが、いかんせん狐の妖術の敵ではない。すると、天罰が山火事となつて降り、妖狐の巢窟は一夜にして焼き尽くされてしまった。村社周辺の田地は人びとに再分配され、かくして平和で実り豊かな村がもとに戻った。

元稹は外任の道すがら、とある妖狐伝説の村里に立ち寄り、その不思議な昔話に興をそそられ、話の一部始終を詩歌にまとめたのであった。いま、その村が果たしてどのあたりに所在し、その社樹が実際にどのようなものであったのかについては、考証するに足る資料が全く無いために、その詳細をつかむことはできない。長安（陝西省）より河南省南部の襄陽そして湖北省荊州に至る街道沿いの伝説であったことは間違いないであろうが、あるいは、かかる中原地域一帯に点在する狐伝承の幾つかを、元稹なりに拾い集め、新たに詩歌として再構成したものであったかもしれない。「那言」「逡巡」など唐代特有の俗語表現による解釈上の障碍はあるものの、一読して拍膝、その素朴な雰囲気は、我が国の昔話にも通じるものがある。

さて、この元稹の詩に対し、白居易が唱和したのが次の作品である。

和古社

廢村多年樹 生在古社隈

爲作妖狐窟 心空身未摧

妖狐變美女 社樹成樓臺

黃昏行人過 見者心徘徊

飢鵬竟不捉 老犬反爲媒

歲媚少年客 十去九不迴

昨夜雲雨合 烈風驅迅雷

風拔樹根出 雷劈社壇開

飛電化爲火 妖狐燒作灰

古社に和す

白居易

廢村 多年の樹、生じて古社の隈に在り。

爲に妖狐の窟と作り、心は空にして 身未だ摧けず。

妖狐 美女に變じ、社樹 樓台と成る。

黃昏 行人過ぎれば、見る者 心徘徊す。

飢ゑし鵬も 竟に捉へず、老いたる犬も 反つて媒を爲す。

歲に媚ぶ 少年の客、十去きて九は回らず。

昨夜 雲雨合し、烈風 迅雷を驅る。

風は樹根を抜きて出だし、雷は社壇を劈きて開く。

飛電 化して火と爲り、妖狐は焼けて灰と作れり。

天明至其所 清曠無氛埃

天明^{よぐあき} 其の所に至れば、清曠として氛埃^{ふんあい}無し。

舊地葺村落 新田闢荒萊

旧地^{ふるち} 村落を葺き、新田^{あら} 荒萊を闢く。

始知天降火 不必常爲災

始めて知る 天の火を降^{くだ}すや、必ずしも常には災^{わざはひ}と為らざるを。

勿謂神默默 勿謂天恢恢

謂ふ勿れ 神は黙黙たりと、謂ふ勿れ 天は恢恢たりと。

勿喜犬不捕 勿誇鵬不猜

犬の捕へざるを喜ぶ勿れ、鵬^{うたが}の猜はざるを誇る勿れ。

寄言狐媚者 天火有時來

言^{忠告するぞ}を寄す 狐媚の者よ、天の火は 時有りて來たらんと。

『白氏文集』卷二、作品番号〇一〇八⁽⁴⁾

この詩は、さきの元稹詩について後日「追和」した作品であり、一般通念では、内容展開も原作とほぼ同じものになる筈である。しかしこの両作品については、一読して明らかのように、その「妖狐」の形象の点で大きな相違が見られる。

ひとびとを幻惑し、丘陵を城壁に、草木や花卉をとげとげしい荆棘に変え、千万頃（唐代の一頃は約五・八ヘクタール）にもひろがる良田を一転して未開の原野に見せたというのが元稹詩の狐であったが、一方、白居易詩に描かれるそれは、妖艶な「美女」に化身し、夕暮れ時に立ち現れ、そこを通る若者たちを次々と誘惑する。つまり、強烈な幻術を駆使する悪魔（元稹詩）に対して、色仕掛けで迫る、なまめかしい妖女（白居易詩）という明らかな形象の違いが存するのである。

思うにこの原因は、白居易における「妖狐伝説」の取材源が、元稹とは全く別な資料に由来していることに拠る。元白の二人は、おもしろいことに、村里に棲む狐の伝説をそれぞれが独自に入手した言い伝えに基づいて描いているのである。

では、白居易の知る妖狐伝説とは何か。その手がかかりは、この「古社」詩の唱和が行われる一年前の元和四年（八〇九）に詠まれた作品に求めることができる。白居易諷諭詩最大の長篇連作「新樂府五十首」の其四十五「古塚狐」である。七言の歌行体詩であるため、その物語的な描写のおもしろさは一層増幅している感がある。なお「和古社」詩との対比を考え、まずは前半十句までを掲げる。

古塚狐 誠艷色也（艷色を誡めたり）

白居易

古塚有狐妖且老	古き塚に狐有り	妖にして且つ老いたり、
化爲婦人顔色好	化して婦人と爲り	顔色好し。
頭變雲鬟面變粧	頭は雲の鬟に變じ	面は粧に變じ、
大尾曳作長紅裳	大なる尾は曳きて長き紅の裳と作せり。	
徐徐行傍荒村路	徐徐に行きて傍ふ	荒村の路、
日欲没時人靜處	日の没りなむと欲する時	人靜なる處。
或歌或舞或悲啼	或ときは歌ひ	或ときは舞ひ
翠眉不舉花顏低	翠き眉	挙ずして
忽然一笑千萬態	忽然に	一たび笑みて
見者十人八九迷	見る者	十人

（『白氏文集』卷四、作品番号〇一六七、その第一句〜第十句）

白居易の思い描く狐は、元稹詩のそれとは異なり、あくまでも色仕掛けで男性を蠱惑する軟派な妖怪である。ま

た、この「古塚狐」の形象が先掲の「和古社」詩の狐にも踏襲されていることは、「日没時」の登場場面、更には第十句「見者十人八九迷」の表現の類似によつても確認される。白居易は、元稹詩の情節に左右されること無く、あくまでも自分自身が思い描く狐を詠むことでその文筆の妙を競つていたのである。

ただし、元稹の狐にせよ、白居易の狐にせよ、その寓話の意図するところは、単に民間伝承の潤色にあるのではなく、現実社会の、特に政治の世界において暗躍する「奸邪な佞臣たち」を指弾することにある点は注意を要する。元稹がなぜ左遷の道中において詩興をそそられたのか、そして白居易がその元稹詩を読んで何を感じ取ったのかと言ふと、それはまさに現実の政治問題にあつたのである。

このことは、白居易「古塚狐」詩後半部の展開においても明確に意識されている。

假色迷人猶若是

眞色迷人應過此

彼眞此假俱迷人

人心惡假貴重眞

狐假女妖害猶淺

一朝一夕迷人眼

女爲狐媚害則深

日長月長溺人心

何況

褒姒之色善蠱惑

仮れる色の 人を迷はすこと 猶ほ是くの若し、

眞の色の 人を迷はすこと 応に此れに過ぎたるべし。

彼は眞 此は仮 俱に人を迷はすとも、

人の心 仮れるを惡みて 眞を貴重ぶ。

狐の女の妖を仮れる 害は猶ほ浅し、

一朝 一夕に 人の眼を迷はすばかりなり。

女の狐の媚を爲す 害は則ち深し、

日びに長り 月づきに長つて 人の心を溺らす。

何に況んや

褒姒が色の 善く蠱惑するに、

能喪人家覆人國

能く人の家を喪し^{ほろぼ} 人の国を覆^{くぐ}すをや。

君看爲害淺深間

君看^みよ 害を爲す淺深の間を、

豈將假色同眞色

豈に仮れる色を將^もて眞の色に同じくせんや。

『白氏文集』卷四、作品番号〇一六七、その第十一句（最終句）

うそとまこと、すなわち仮色（Ⅱ狐）と眞色（Ⅱ亡国の美女）という対比は、恐らく「世間虚仮」という仏典由来のレトリックに^⑥ヒントを得たものであろうが、更には清代の小説『紅樓夢』の「假作眞時眞亦假、無爲有處有還無（仮の眞と作る時、眞も亦た仮、無の有となる処、有も還た無）」（第一回・第五回）にも通じる中国文学史上の重要なテーマでもある。また同時にこの主張は、我が国『源氏物語』螢の巻に展開される紫式部の物語論にも繋がっているようにも思われ、その興味は尽きない。

だが、この白居易「古塚狐」詩は、その内容展開において、いささか不完全な印象を拭い去ることができない。雲のごとき鬢髪、化粧成りたる容貌、更には尾を真紅のスカートとなし、ひとけ無い村里に行く女妖。彼女は、歌舞のしぐさかと見れば、一転して泣き崩れ、どうしたのかと駆け寄れば、また俄に微笑を浮かべて遠ざかる……かくも精緻な描写が展開されたこの歌物語は、第十一句において、いきなり「仮色の人を迷はすことは猶ほ是くの如し」として一括され、その描写が打ち切られる。この終わり方は、今日の我々から見ても、あまりにも唐突に過ぎよう。もとよりこの詩は、妖狐の悪戯^{いたずら}以上に褒姒（周の末代幽王の妃）や妲己（殷の紂王の妃）といった「本物の女色」こそが国家を危機に陥れる害悪だと訓戒する作品であるが、その所為であろうか、妖狐に関する形象には、何がしか物足りなさがつきまとうのである。

しかしここに、白居易青年時代の「幻の作品」の存在を想定すると、この「新樂府」における不自然な省略にも相

応の合点がゆくように思われる。すなわち現在に僅かに断片八句のみを残す「任氏行」である。白居易が「古塚狐」詩において、何故かくも簡略な描写に留めたのか、そして翌年の「和古社」詩において、元稹の原作に反してあくまでも「女妖としての狐」を描くことに固執したのか、と言えば、それは白居易にはこれらの作品が詠まれる更に以前に「任氏行」が発表されており（しかもそれは後述するように青年期の出世作として話題を呼んでいたと推測される）、「古塚狐」詩や「和古社」詩は、言わばその白氏前作の再詠であるために、かかる大幅な省略が可能であったと考えられるのである。

青年時代の白居易には、その「長恨歌」を発表する以前にも、既に唐土の人々を魅了した長篇の話題作が存したのである。

二 白居易「任氏行」とその創作地点

白居易の逸詩「任氏行」（一名「任氏怨歌行」）は、現在、日本の大江維時（八八八〜九六三）撰『千載佳句』に二聯四句が、そして中国南宋時代の類書『錦繡万花谷』（無名氏撰、淳熙十五年「一一八八」序）に更に別の二聯四句が残されている。⁽⁹⁾ この作品については、さきに静永の小文「白居易の青春と徐州、そして女妖任氏の物語」⁽¹⁰⁾（以下、前稿と略称）においても少しく言及したが、唐代屈指の「伝奇」作家沈既济によって書かれた「任氏伝」に基づき、それを読んだ若き日の白居易（後述する如く、おそらくは二十歳前後）が創作した七言の歌行体詩であった。

いま、その粉本となった沈既济「任氏伝」⁽¹¹⁾のあらすじを紹介すれば、およそ以下のように七つの段落に分けて説明することができる。

時は天宝九年（七五〇）夏六月のこと。都長安に王族の外孫の韋金と、その飲み友たちで従父妹の婿の鄭六（六は排行。名は不明）がいた。韋は風流を解する裕福な若者、対する鄭は風采拳がらぬ貧乏武芸者であった。その日、韋との約束の場所に行こうとした途中、鄭六は美しい女性任氏（実は狐の化身）に遭遇し、幻誘されるまま廢宅での一夜を共にした（「以上第一段」）。やがて正体を知った鄭六であったが、任氏の艶冶な美貌を忘れがたく、数日後、西市の街角で再会した彼は、あろうことか彼女に対して熱烈な告白を試みる（「以上第二段」）。同棲を始めた二人。そこに何も知らない韋金が横恋慕して任氏に迫ろうとする。折しも鄭は不在。任氏最初の危機である。だが任氏の鄭六に対する誠実な愛を知った韋金は、以後、彼女のよき理解者となる（「以上第三段」）。次の二段は任氏の超能力の話。任氏が韋金のため「緬將軍」寵愛の妓女との密通を手引きする話と（「第四段」、鄭六に市場で「股に疵」がある凶相の馬を買わせて大儲けさせる話である（「第五段」。やがて槐里府の属官として地方任官が決まった鄭六は任氏に同行を求める。当初は離京をかくなく拒む任氏であったが、遂に鄭六の願いを聞き入れ、彼の赴任に同道する。果たして、途中馬鬼において獵犬の察知するところとなり、彼女は「本形」に戻って逃げ走るが、あえない最期を遂げる（「以上第六段」。物語の末尾は沈既済の自述。すなわちこの奇譚は、大暦年間（七六六～七七九）に鍾陵（いまの江西省南昌市）の刺史となっていた韋金より沈既済が直接訊いた話であること、そして建中二年（七八一）沈既済らの江南左遷に際し、赴任の船中でこの物語を披露し、乞われるがままに文章化したものであるという説明である（「第七段」。

以上の内容展開に従って、次に現存する白居易「任氏行」の残句を掲げよう。ちなみにここでは沈既済の原作との整合性を考え、『錦繡万花谷』所収の二聯（①②）を前、『千載佳句』所収の二聯（③④）を後に列記する。

① 蘭膏新沐雲鬢滑
寶釵斜墜青絲髮
蘭膏 新たに沐して 雲鬢滑らかに、
宝釵 斜めに墜おつ 青糸の髪。

〔錦繡万花谷〕前集卷十七、美人

② 蟬鬢尚隨雲勢動
素衣猶帶月光來
蟬鬢は 尚ほ雲勢に随ひて動き、
素衣は 猶ほ月光を帯びて來たる。

〔右に同じく〕『錦繡万花谷』前集卷十七、美人

③ 燕脂漠漠桃花淺
青黛微微柳葉新
燕脂は漠漠として 桃花のごとく淺く、
青黛は微微として 柳葉のごとく新し。

〔『千載佳句』人事部・美女、作品番号四四二〕

④ 玉爪蒼鷹雲際滅
素牙黃犬草頭飛
玉爪の蒼鷹は 雲際に滅きえ、
素牙の黃犬は 草頭に飛びさる。

〔『千載佳句』遊放部・遊獵、作品番号八九七〕

四聯は各々押韻字が一致しないため、おそらくは連続しない別々の場面を詠じた詩句と思われるが、①②の二聯は、第一段の任氏登場の場面、もしくは同段中盤の鄭六と任氏の邸内会面の情景に相応しいであろう。いずれも任氏の美貌を描くものであるが、①聯のつややかな髪の毛の描写、また②聯「月光を帯びて來たる」という表現は、特に夜（月夜）の場面を彷彿とさせる。

次に『千載佳句』所収③聯は、①②同様第一段に属すると考えることもできるが、沈既濟の原作を読む限り、こちらは第三段部分に相当する可能性が高い。すなわち韋崑が任氏の美貌に驚喜する場面である。原作では、韋崑の

家僮がまずこれを覗^{うかが}い、「奇怪なり、天下未だ嘗て之れを見ず矣」と賛嘆の声を挙げ、その報告を受けた韋崑が「天下に豈に斯^かかる人有らんや」と、やおら鄭六の新居を訪れ、任氏と初めて対面するくだりである。先述の通り①②聯が月夜の景に相応しいのに対し、③聯は陽の光を受けての容姿を詠じるかの如くであり、想像するに、①②は鄭六の視点から、③は韋崑（あるいは韋崑の家僮）の視点を通しての任氏像と捉えることができる。

最後の④聯は、もはや贅言を費すまでもなく、任氏落命の場面である。狐に戻った任氏にとどめを刺し、惜しげもなく次の獲物を目差して去って行く「蒼鷹」と「黄犬」の対偶表現は、餘音嫋々たる物語のラストシーンにこそ相応しいものである。もし仮に、この二句を以て「任氏行」が完結しないとしても、この詩句は、限りなく結末部に近い箇所⁽¹⁾に位置した筈である。例えば「此の恨みは綿々として絶ゆる期無からん」を以て結ばれる「長恨歌」や、「琵琶引」の「江州司马青衫湿ふ」という印象的な終わり方を考え合わせるに、その感はますます強くなる。

沈既済の原作では、このあと鄭六が泣きながら囊^{さいふ}中より錢を出し、任氏の亡骸を引き取る場面、都に一人戻った鄭六と韋崑の再会、そして鄭六が遂に韋崑に任氏の正体を明かし、二人で任氏の墓を訪れる場面が用意されている。しかし、それらはいずれも後日談的な挿話であり、詩歌としての結末は、やはりこの任氏落命の瞬間にこそ設定されて然るべきであろう。

なお、沈既済の原作では、任氏殺害の実行犯は唯一「蒼犬」のみであった。これを白居易詩では「蒼鷹」と「黄犬」の二匹とし、馬上の任氏を天空と地上の双方より挟撃する形を取るもののようである。思うに、これも白氏の創見に出づるものである。詩歌として描く場合、二つの物が双方向より同時に迫る方が、その対偶表現に叶う。白居易は単に沈既済の原作を忠実に再現するのではなく、時には自由に創作の筆を走らせているのである。かくして、白居易「任氏行」残句四聯の描写は、いずれも散文作品では十全な表現が尽くせない極めて印象深い情景が展開されているように思われる。「任氏行」足本の亡佚がまことに惜しまれるところである。

*

さて、かかる秀作の痕跡を窺わせる白居易「任氏行」であるが、この作品は、いつ、そして、どこで創作されたものであるのだろうか。

まず、時間的な視点から考察してみよう。

すでに本稿第一節に述べた通り、「和古社」詩（元和五年作）、「古塚狐」詩（元和四年作）は、「任氏行」に後続する作品⁽¹⁵⁾らしい。しかし、更に挙ぐべきは「長恨歌」（元和元年作）であろう。任氏の物語は、一天宝年間後半期の話であること、二人間とは思えぬ、絶世の美女の登場、そして三に馬嵬坡での非業の死など、多くの点で楊貴妃の経歴に重なる点が多いが、詩人白居易における「任氏行」の創作は、謂わば「長恨歌」のための試作品的な役割を果たしたのではあるまいか。従って「任氏行」は必ずや「長恨歌」に先行して発表された筈である。

またこのことは、現在に伝わる『白氏文集』中において「長恨歌」を第十二巻に留め「任氏行」を留めなかった事実とも符合する。白居易は自家の文集を編むに際し、自信作「長恨歌」を掲げたが、同時にそれ以前（若い頃）の作品を破棄⁽¹⁶⁾していた形跡がある。よって「任氏行」の成立年代は、まずは沈既済の原作「任氏伝」の発表された建中二年（七八二）を上限に、そして「長恨歌」が作られた元和元年（八〇六）をその下限として考えてよいであろう。白居易の年齢に換算すれば数え年十歳から三十五歳までの間となるのである。

では次に、地理的な視点から更にこれを絞り込んでみたい。

この点、筆者はまず貞元十六年（八〇〇）正月を以て一つの線を画したいと思う。すなわち白居易が郷貢進士の資格を得て初めて都長安にやってきた年である⁽¹⁷⁾。

前述の通り、沈既済の原作「任氏伝」は都長安を舞台として展開されていた。しかし、白居易「任氏行」の残像を

留める「古塚狐」詩、そして「和古社」詩は、いずれも辺鄙な「荒村」（「古塚狐」第五句）であり「廃村」（「和古社」詩冒頭）を舞台とするものであった。思うに、このことは白氏「任氏行」の舞台がやはり地方の一農村を想定して展開されていたことを示すものと考えられる。すなわち、白居易はいまだ実際の長安を目にしていない時期にこの「任氏行」を構想したと判断されるのである。よって白居易「任氏行」創作時期の下限は貞元十五年（七九九）、白氏二十八歳の時まで遡ることができないだろう。

いよいよ具体像が見え始めた。

十代から二十代にかけての白居易の閱歷に照らして更に考察を進めて行くと、その「任氏行」創作の地点は、まさしく徐州（いまの江蘇省徐州市および安徽省宿州市の一带）において他にないと筆者は考える。既に筆者の前稿に述べた如く、白居易居留時代の徐州は、「重臣」として中央の信任も厚かった張建封が刺史として治政に当たり、この当時にあつてはまことに貴重にも、地方軍閥の戦乱が一時的に停止し、よって徐州には「許孟容や韓愈などの文人が（其の往くこと帰するが如く）集まつた」（『旧唐書』張建封伝による）という。そして、これも前稿に述べたが、白居易の起居した徐州南部の符離県では、実際に劉五（名未詳）や張徹、賈餗など、白居易に文学的な刺戟を与えた多くの先輩文人たちが雲集し、互いに切磋琢磨する好環境が成立していたものようである。十五六歳の頃「始めて進士有るを知り、苦節して読書した」（『与元九書』、『白氏文集』卷二十八、作品番号一四八六）というのは、まさしくここ徐州でのことであり、また「二十已来、昼は賦を課し、夜は書を課し、間にまた詩を課し、寢息するに違あらず」（同じく『与元九書』）というのも紛れもなく徐州であつた。更に加えて、これも前稿に略地図を挿入して述べたが、沈既濟が「任氏伝」を語り伝えたのは、鄭州より東南に向かう「潁水」と「淮河」の船中であつた。この経路は奇しくも徐州の南境を通過することになるのである。

戦乱の鎮静化、切磋琢磨の友の存在、新奇な文学作品を次々と運び伝える水上交通、そして、二十代の多感な苦

学生生活、このような中で、青年白居易は果たして「任氏伝」に際会し、そして自ら筆を援り「任氏行」を創作した、と筆者は、もはや一点の曇り無く確信するのである。

なお、白居易が「任氏伝」を耽読し、かつ「任氏行」の創作に没頭していた傍らには、弟白行簡の姿もあつたに違いない。行簡はのち「李娃伝」など伝奇作家としてその文才を開花させることになるが、「李娃伝」が「任氏伝」の影響の下に創作されたことは、もはや唐代伝奇研究の定説となつてゐる。また、更に白行簡について特記すべきことは、彼が科擧の受験勉強中に創作した作品に「狐死正丘首賦」(『文苑英華』卷一三四所収)があることである。この賦題は『礼記』檀弓上篇の「古^{いにしへ}の^{いひ}人言へる有りて曰く『狐死するや、正に丘首す』とは仁なり。」を出典とするが、白行簡がこの一句に創作の興味を懷いた背景には、当時の徐州において、にわかに流行していた任氏説話の影響があつたようにも想像されるのである。

以上を要するに、白居易が「任氏行」を創作した地点は徐州であり、それは彼が刻苦勉励の日々を過ごした十代から二十代にかけての頃であると考えられる。そして筆者の結論としては、その中でも徐州刺史張建封が着任する貞元四年(七八八)を起点とし、白居易が科擧受験のために上京する前夜の貞元十五年(七九九)までの時期を最も有力視する。白氏の年齢に換算すると十七歳より二十八歳。まさに多情多感な青春時代に当たるのである。

三 「任氏行」の伝播

このように、白居易「任氏行」は彼が二十歳前後の青年時代を過ごした徐州で創作されたと推定せられる。

そこで筆者は、「任氏行」がここ徐州で創作されたのみならず、更に同地を発信源として次第にその評判が各地に伝えられていったと考えたい。その根拠は、取りも直さず日本の請益僧円仁(七九四〜八六四)の購書目録『慈

覺大師在唐送進録¹⁹」に、「任氏怨歌行一帖 白居易」との一項が見える事実に存している。

『入唐求法巡礼行記』²⁰の筆者として名高い天台僧円仁は、唐の開成三年（八三三、日本の承和五年）六月に博多湾を出航、翌七月に揚州（江蘇省）に到着する。その後、約半年間の揚州滞在を経て、翌年二月には正使藤原常嗣一行とともに運河を北上して楚州（いまの江蘇省淮安市）へ、次に新羅を目差して渡海するのだが、あいにく山東半島の突端に位置する登州赤山浦に漂着する。そして、この登州において、円仁は、周知の通り唐土在留を決意し、常嗣一行と別れ、同伴の惟正、惟曉二人の僧侶とともに下船することになるのである。

上述の『在唐送進録』は、このとき船中の栗田録事に託され、円仁より先に日本に送り届けられた書籍や画像類の目録であり、円仁が約一年間の滯華期間中に購入あるいは筆写したものである。ここに白居易「任氏怨歌行」の書名が見えることは、この当時の揚州あるいは楚州にあつて、白居易の詩歌がどのように広まっていたかを示す極めて有力な手がかりとなる。

例えば、同目録には元稹と白居易がそれぞれ越州と杭州の刺史として赴任していた際の往復唱和詩集「杭越寄和詩并序一帖」の名も見える。この詩集は、おそらく越州（いまの浙江省紹興市）において元稹が編集し、越州を発信源として伝えられたものであろう。²¹だとすれば、白居易「任氏行（任氏怨歌行）」も、はるばる都長安や洛陽からもたらされたものではなく、中国中部沿海地域を発信源とし、やがて水路を通じて揚州周辺に伝えられた可能性が高い。白居易が「任氏行」を創作したと推定せられる徐州は、円仁の通過した楚州とは淮河で結ばれている。また、言うまでもなく揚州はそこより運河で疏通している極めて至近至便な地域である。「任氏行」は、白居易自編の『白氏文集』とは、その発表当初より別々に、江南地域を中心に単独で読まれていた形跡があるのである。

では、何故「任氏行」は、このように根強く（前節に推定した白居易の青年期から計算すると円仁の入手は約三十年の歳月が経過している）読まれ続けていたのであろうか。

まず第一に挙ぐべきは、原作たる沈既济「任氏伝」の流行である。本稿前節および静永の前稿にも述べた如く、「任氏伝」は淮河沿岸で書かれたものである。白居易が直接手にしたもの、おそらく水路沿いに伝承され筆写されていた一本であろう。もしそうであるならば、当時はまだ無名だった白居易ではあるが、自己の作品を「沈既济の続篇」として発表し宣伝することが可能であったと思われる。また、前節に挙げた残句を見てもわかるように、その詩篇は、歌行詩ならではの卓れた表現力を備えていた。おそらく白詩の読者は、沈既济の散文ではいまだ十分には味わい尽くせなかった任氏の美しさや更にはエロティックな表現を存分に楽しむことができたのであろう。そして何よりもこの伝奇には、異能を持つ美麗な女狐が一人の平凡な男性のために一途な愛を貫くという意外性があり、また、その最後にはこの上なく美しく、もの悲しい結末が用意されているのである。「任氏行」は、その後、彼の続作「長恨歌」の流行とともに、再び世の脚光を浴びたかとも思われるが、それ以前に、単独でも多くの人々によって広く読まれるべき要素を十分に持っていたのである。

さて、第二には、当時の中国中原地域と、更には日本にも繋がると思われる一つの土着信仰をめぐる要因について考察したい。

『太平広記』巻四四七より巻四五五に至る九巻は、沈既济「任氏伝」を含め、全てが「狐」に関する説話集となっている。その中に、僅か三十九字の簡略な記述ながら、当時広く行われていた土着信仰の記録が見える。

唐初已來、百姓多事狐神。房中祭祀以乞恩、食飲與人同之。事者非一主。當時有諺曰「無狐魅、不成村」。

唐初已來、百姓多く狐神に事ふ。房中に祭祀して以て恩を乞ひ、食飲は人とのれを同じふす。事ふる者は一主に非ず。当時諺有りて曰く「狐の魅くこと無くんば、村を成さず」と。

（『太平広記』巻四四七、「狐神」。出典は『朝野僉載』という。）

すなわち、唐代には土地神および家の守り神として、多くの人々が狐神を崇め、「狐がつかないと、村ができない」とまで言われていたという。この記述を知ったとき、全く違和感なく筆者に思い起こされたのが、我が国の今日にも普遍的に存在する「稲荷信仰」²²⁾である。家の守り神、豊穰の神、そして商売繁盛の神としてさまざまに、かつ全国の津々浦々に祀られ、赤い鳥居を目印に、更には人間の食する「油揚げ」を好物として供えられるこの神は、もしかするとこの唐朝の土着神と起源を等しくするのではないだろうか。しかも、この『朝野僉載』所引の記述（現在は佚文）は、本稿冒頭に挙げた元稹「古社」詩と白居易「和古社」詩の舞台たる村社の光景に、まさしく一致する。白居易「任氏行」が広く中国各地の人々にまで読まれるに至った背景には、このような「狐神」信仰（およびそれに付随する悪戯好きな狐の伝承）という共通理解が存在したからであろう。そして、海の向こう、まだまだ言語や文化面でも大きな隔たりがあつたと思われる九世紀の我が国において、なぜ「任氏行」が書き写され、遣唐使船や往来する商船の中に舶載され、その後、大いに読まれるところとなつたのかと言えば、やはりこの「稲荷信仰（狐伝承）」の共通基盤が存在したからであるとは考えられないであろうか。²³⁾

しかも、「任氏行」の流行には他にもこれを推測するべき状況証拠が残されている。

元和元年冬十二月、太原白樂天自校書郎尉於監屋。鴻興瑯邪王質夫家於是邑。暇日相攜遊仙遊寺、話及此事、相與感歎。質夫舉酒於樂天前曰、夫希代之事、非遇出世之才潤色之、則與時銷没、不聞於世。樂天深於詩、多於情者也。試爲歌之如何。樂天因爲長恨歌。

元和元年（八〇六）冬十二月、太原の白樂天 校書郎より監屋に尉たり。（陳）鴻 瑯邪の王質夫と与に是の邑に家せり。暇日 相携へて仙遊寺に遊び、話 此の事に及び、相与に感歎す。（王）質夫 酒を樂天が前に挙げて曰く、「夫れ希代之事は、出世の才に遇ひて之れを潤色するに非ざれば、則ち時と与に銷没し、

世に聞こえず。樂天は詩に深く、情に多き者なり。試みに^た為に之れを歌ひては如何？」と。樂天 因りて長恨歌を^{つく}為る。

（陳鴻「長恨歌傳」…『白氏文集』卷十二所引）

有名な陳鴻「長恨歌伝」の文末、白居易が「長恨歌」を詠むに至る顛末を紹介した記述部分である。周知の通り「長恨歌」は、友人王質夫からの慫慂を承け、白居易がその詠歌を担当し、陳鴻が伝（散文）を担当したものである。²¹しかしこの記述における王質夫の言葉を見ると、白居易は「長恨歌」発表以前に、既にこれに匹敵するような素晴らしい詩歌を発表しており、世の人々の注目を集めていたかのように見受けられる。すなわち「詩に深く、情に多き者」という王質夫の白居易評、およびその前文にある「出世の才」という最高の賛辞がそれを明示している。

だが、今日伝わる『白氏文集』中に、明らかに「長恨歌」以前の作と思われる作品は数少なく、また、その少数の作品中には、「長恨歌」に匹敵するような長篇の大作は、全く残されていない。王質夫はいったいどのような根拠に基づいて、白居易の詩才を何故かくも仰々しく称賛したのであろうかと、訝しく思われるほどである。

しかるに、ここに徐州雌伏時代の彼が発表した「任氏行」の流行を想定するならば、この王質夫の言葉はまことに自然な発言となる。前節にも述べた如く、女妖任氏の物語は、その随処に天宝末年の楊貴妃事件を下敷きにした部分が見られる。前輩沈既濟の伝奇を詩歌化した作品「任氏行」の発表とその成功こそが、白居易にとって、約半世紀前の楊貴妃事件に深く思いを致すき、²²つけかけを作ったとは考えられないだろう。

四 「任氏行」の消滅

かくして、白居易の幻の名作「任氏行」は、九世紀の中国各地に広まり、また、同時期の我が国にも伝えられた。

例えば『千載佳句』以降では、藤原基俊（一〇六〇～一二四二）撰『新撰朗詠集』²⁵（「春」の部、「雨」の項）に、源英明（？～九四一）の次の詩句が収録されている。

寫得楊妃湯後靨　　寫し得たり　　楊妃（楊貴妃）湯の後の靨（えづ）
模成任氏汗來脣　　模し成せり　　任氏　汗の來（のち）の脣（くちびる）

（源英明「春雨洗花顏」詩²⁶）

我が国における任氏伝説の受容については、この他にも数点の作品が指摘されている。²⁷しかし、その中でも特に目を引く資料が、「任氏行」が次第に平安人士の記憶から消えてしまった、という衝撃的な事実である。

宜秋門院の御名の定めありける時、兼光中納言「任子」と云ふ御名を奉られたりけるを、静賢法印申して云く「白氏の遺文に任子行といふ文あり。しかも彼は事ある文なり。此の御名はいかがあるべからん」と申したりければ、九条殿用ゐさせ給ひて、あまねく御尋ねありけれども、「さる事あり」と申す人も無かりけるに、敦綱ばかりこそ覚えて、「さる事侍り、尤も去らるべき事なり」と申したりけれ。大才の人も、自ら見及ばぬ事あり、力及ばぬ事なり。

（『続古事談』巻一「王道・后宮」、総第三六段²⁸）

関白九条兼実の娘で、後鳥羽天皇の中宮となる九条任子（一一七三～一二三八）の命名について、異議を唱える者があつたが、もはやその異議に賛同する者は藤原敦綱一人であつたという記事である。文末の「大才の人」とは、任子という名を提案した中納言藤原兼光（一一四五～一一九六）を指すが、もはやこの平安末期には白居易の詩文

についての知識も、大集である『白氏文集』から漏れた作品には関心が徐々に薄らぎつつあったことを示している。また『続古事談』には更に一条、白居易「任氏行」についての概略が記されている段がある。

白楽天の遺文の、『文集』に入らざる有り。其の中に「任子行^{マヤ}」と云ふもの有り。彼の文には、狐の女人となりて、男に会ひたりけるを、彼の男、深く愛念して、暫くも離れじとしける程に、狩場^{かりば}へ出づるとて、馬の前に乗せてけり。よき犬を具したりけるが、此の女の狐なる事を知りて、飛上りて喰ひ落としてけり。其の事を作りたる文なり。行といふは、謡歌など舛^{マヤ}のものなり。文筆の一つの姿なり。宜秋門院御名任子事有^{マヤ}之、王道帖有^{マヤ}之。

(同巻六「漢朝」、総第一七七段)

日中双方における白居易「任氏行」の、最も詳細にして、かつ残存資料中最も後年の記述である。こののち白居易のこの逸詩についての言及は、杳として聞くことが無い。大集『白氏文集』(白氏所述七十五卷、現存七十一卷)に収められなかった当然の結末であるが、また、常に新たな作品に淘汰され、次々に読み棄てられてゆく「娯樂的作品」の宿命とも言い得よう。しかし、更にその原因を究明するならば、白居易本人がこの青年期の未熟な作品を意識的に排除しようとしていた結果でもあるとも言えるのではないだろうか。

白氏前著長慶集五十卷、元微之爲序。後集二十卷、自爲序。今又續後集五卷、自爲記。前後七十五卷、詩筆小凡三千八百四十首。集有五本、一本在廬山東林寺經藏院、一本在蘇州南禪寺經藏內、一本在東都聖善寺鉢塔院律庫樓、一本付姪龜郎、一本付外孫談閣童。各藏於家、傳於後。其日本新羅諸國及兩京人家傳寫者、不在此記。又有元白唱和因繼集共十七卷、劉白唱和集五卷、洛下遊賞宴集十卷、其文盡在大集內。錄出別行於時、若集內

無、而假名流傳者、皆謬爲耳。會昌五年夏五月一日、樂天重記。

白氏の前著『長慶集』五十卷、元微之（元稹）序を爲す。『後集』二十卷、自ら序を爲す。今又『統後集』五卷、自ら記を爲す。前後七十五卷、詩筆は大小凡て三千八百四十首。集に五本有り、一本は廬山東林寺の經藏院に在り、一本は蘇州南禪寺の經藏の内に在り、一本は東都（洛陽）聖善寺の鉢塔院の律庫樓に在り、一本は姪龜郎（弟行簡の遺児）に付し、一本は外孫談閣童（娘阿羅の子）に付す。各々家に藏し、後（子孫）に伝へしめんとす。其の日本・新羅諸国および兩京の人家の伝写せる者は、此に記すところに在らず。又『元白唱和（集）』『（元白）因繼集』共せて十七卷、『劉白唱和集』五卷、『洛下遊賞宴集』十卷、其の文は尽く大集の内に在り。録出して時に別行するものの、若し集内に無く、而も名を仮りて流伝する者あらば、みな謬爲（偽作）なるのみ。 會昌五年（八四五）夏五月一日、樂天 重ねて記す。

（白居易「白氏集後記」、那波本『白氏文集』卷七十一卷末、三七六三）

この「後記」は、『白氏文集』の全巻の跋文として、白居易みずからが逝世の十五ヶ月前に書き綴つたものであるが、その自己の作品についての「偽作」「誤伝」に対する言動は、まことに厲しい。偽作の混入によつて自らの文学的評價が汚辱されることを切に忌避する所以であろうが、その執念とも言うべき気迫は、読む者をして肅然とさせるものがある。

この文中に「日本や新羅の諸外国および長安・洛陽で一般に伝写されているものは、この《後記》が証明するところではない」、つまり白居易の真作とは認めないという発言がある。このとき、白居易がいつたいどのような作品を念頭に置いていたのかは明確にし難いが、見方によつては単なる「偽作」を排除するだけでなく、白居易みずからがその詩稿を破棄した「若年期」の作品をも含んでいるように読み取ることができる。「任氏行」消滅の過程

には、単なる時間の経過による自然磨滅のみを考えていては説明し難い原因が存在するように思われるのである。

さて、最後に白居易「任氏行」が、何故我が国の『千載佳句』と中国南宋期の類書『錦繡万花谷』にのみ残存したかを少しく考えておきたい。特に『千載佳句』には、既に金子彦二郎氏および近年では植木久行氏に考証があるように、この「任氏行」の二聯を含む二十三聯（実際は一聯重出。二十二聯）もの逸詩句が残されている。しかし、これらの詩聯は、例えば宋代の『文苑英華』や『樂府詩集』、『唐文粹』など総集類の抄録に重ならない全く孤立した残句である。思うにここには、先にも述べた通り「大集に見えないものは謬作」とする実作者白居易の意志の反映があるとは考えられないだろうか。すなわち『文苑英華』等宋代の総集類に抄録されて残る作品は、基本的におそらく唐末五代から北宋時代に存在していた大集『白氏文集』より写し取られたものである。従って、これらの作品は時に『金沢文庫旧藏本白氏文集』および『管見抄』『要文抄』等我が国平安より鎌倉時代にかけての旧鈔本と重なり、また本文の字句もほぼ近い関係にある。しかし、『千載佳句』および宋代の類書に残存する白詩の逸文は、第三者の偽作の可能性もあるが、中には生前の白居易が「大集」より意図的に除外したもの、つまりは「若き日の作品」が残している場合が大いに考えられるのである。

ちなみに、その『千載佳句』所収の白氏逸詩句の中には、題によって示せば「七夕」（七夕）部・千載佳句番号二四七、「春詞」（美女）部・四四一、「閨情」（艷情）部・四四六、「木芙蓉」（木芙蓉）部・六一七、「新艷」（箏）部・七六八）など、かつて白居易が「新艷の小律」と称したものに近い艷麗な内容の詩句が散見される。これらの作品は、白居易の自編による『白氏文集』からはその当初から除外されていたものの、その後約三〇〇年間は、人々の記憶の中に残存し、美麗な詩句を抜粋する宋代の「類書」や我が国の「朗詠集」などの編纂に際しては、その記憶が再び呼び覚まされ、かくしてその秀逸の遺文が書き留められるに至ったものであろう。

「任氏行」は、かくして滅び、そして、かくして残された、と考えられるのである。

注

- (1) 白居易「和答詩の序」(『白氏文集』巻二、作品番号〇一〇〇)に「足下の江陵に到るに及びて、路に在りて為る所の詩十七章を寄す。凡て五六千言、言に為す有り、章に旨有り。宮律の体裁に迫るまで、皆作者の風を得たり。発絨開卷して、且つ喜び且つ怪しむ。……何ぞ意を立て辞を措くこと、足下の前時の詩と、此くの如く相遠さからんや」とある。またこの元白「和答詩」唱和については、平岡武夫『白居易』(中国詩文選17、筑摩書房、一九七七年)にも詳述されている。
- (2) 本稿が引用する元稹の詩文は、冀勤点校『元稹集』(中華書局、一九八二年)を底本とし、適宜諸本を参照する。また作品番号は花房英樹『元稹研究』(彙文堂、一九七七年)所収「綜合作品表」に拠る。
- (3) 「那言」は、『漢語大詞典』にこの元稹「古社」詩の用例を引いて「豈知」(豈料)と解釈する。「逡巡」に「迅速」の意味での用例のあることは、張相『詩詞曲語辭匯釈』(中華書局、一九五三年初版)に見える。
- (4) 本稿が引用する『白氏文集』は、「新樂府」(古塚狐)を除いて、巻数表示を那波本に従い、本文を宋紹興刊本に従い、更に細かな字句異同について適宜諸本を参照することとする。また作品番号は花房英樹『白氏文集の批判的研究』(彙文堂、一九六〇年。のち朋友書店、一九七四年再版)、作品繫年は花房氏上掲書と朱金城『白居易集箋校』(上海古籍出版社、一九八八年)等を参照。
- (5) 本稿が引用する白氏新樂府「古塚狐」については、現京都国立博物館所蔵の嘉承二年(一一〇七)藤原茂明抄本(通称神田本白氏文集)に基づき、その古訓も同抄本のものをつとめて採用した。太田次男・小林芳規『神田本白氏文集の研究』(勉誠社、一九八二年)に拠る。また、新樂府本文の異同と古訓の採録に当たっては、太田次男「成田山仏教研究所所蔵白氏文集巻三・四元禄写本について」(『成田山仏教研究所紀要』第二十五号・第二十七号、二〇〇二年・二〇〇四年)をも同時に参照した。
- (6) 孟浩然(六八九〜七四〇)「雲門寺西六七里聞符公蘭若最幽、與薛八同往」詩に「四禪合眞如、一切是虛假(四禪こそ合に眞如なるべし、一切は是れ虚仮)」と。また、我が国聖德太子(五七四〜六二二)作とされる『上宮聖德法王帝説』にも有名な「世間虚假、唯佛是真」の言説がある。
- (7) ひそかに思うに『源氏物語』螢の巻の当該部分に「深きこと浅きことのけぢめこそあらめ」とあるのは、

白詩「古塚狐」の「君看爲害淺、深間」に拠るのではないだろうか。

- (8) 白居易「新樂府五十首」には、他にも白居易の既発表作を歌行体詩として再詠したものが幾つか見出される。例えば「長恨歌」および楊貴妃に関するものについて言えば、其七「上陽白髮人」詩、其八「胡旋女」詩、其二十一「驪宮高」詩、其三十六「李夫人」詩に応用される。また「秦中吟十首」についても、其六「立碑」と新樂府其四十一「官牛」、同其八「五絃」と新樂府其十七「五絃彈」、同其十「買花」と新樂府其二十八「牡丹芳」など、多くの対応関係を指摘することが出来る。これについては静永「白居易「諷諭詩」の研究」(勉誠出版、二〇〇〇年) 中篇第二章と第四章を参照。

- (9) 『千載佳句』の底本は『国立歴史民俗博物館蔵貴重典籍叢書・文学篇第二十一巻』所収本(臨川書店、二〇〇一年)とし、作品番号は金子彦二郎『平安時代文学と白氏文集・千載佳句篇』(培風館、一九四三年)に拠る。一方『錦繡万花谷』は明嘉靖刻本の影印(上海辞書出版社、一九九二年)に拠る。なお「任氏行」残句に関する研究としては、太田晶二郎「白氏詩文の渡来について」(『太田晶二郎著作集』第一冊所収、吉川弘文館、一九九一年。論文初出は一九五六年)のほか、近藤春雄『唐代小説の研究』(笠間書院、一九七八年)、同氏著『白氏文集と国文学・新樂府・秦中吟の研究』(明治書院、一九九〇年)、植木久行「『千載佳句』所収白居易逸句考(上)」(『白居易研究年報』第二号、勉誠出版、二〇〇一年。また下篇は同誌第四号、二〇〇三年)、新間一美『源氏物語と白居易の文学』(和泉書院、二〇〇三年)等を参照した。

- (10) 静永「白居易の青春と徐州、そして女妖任氏の物語」(九州大学中国文学会『中国文学論集』第三十五号、二〇〇六年)。

- (11) 『太平広記』巻四五二。なお、訳注として今村与志雄『唐宋伝奇集』(上、岩波文庫、一九八八年)、黒田真美子『中国古典小説選5・唐代Ⅱ』(明治書院、二〇〇六年)を参照した。また、沈既济「任氏伝」を中心とする妖狐伝説の文学史的演変については、西岡晴彦「任氏伝 遡源考Ⅱ狐妖婚姻譚の系譜Ⅱ」(熊本大学『法文論叢』文学篇第三十五号、一九七五年)および同氏「任氏と嬰寧の間Ⅱ狐妖イメージの変容Ⅱ」(東京大学東文研『東洋文化』58、一九七八年)を参照。

- (12) 『広韻』で示せば、①「髪」は入声十月韻、「滑」は入声十一没韻(月・没韻は同用)。②「来」は上平声十六咍韻。

③「新」は上平声十七真韻。④「飛」は上平声八微韻。

(13) 杜甫の名作「月夜」詩の「香霧雲鬢濕ひ、清輝玉臂寒からん」を想起させる。

(14) この④聯の後に強いて幾ばくかの詩句が用意されると想定すれば、任氏の乗った馬上に「蟬蛻めづがら」のごとく残された衣服や履襪、そして地に落ちたまま収める人も無く散乱する筭こしがいや首飾りの描写であろうか。だとすればその情景は「長恨歌」の楊貴妃縊殺の場面「花鈿は地に委して人の収むる無し、翠翹 金雀 玉搔頭」に極めて近いものとなるであろう。

(15) この二首が沈既済の原作だけでなく、自作「任氏行」詩の表現を継承していることは、例えば「和古社」詩の「飢鵬」「老犬」の対句表現によっても明らかである。

(16) 現存する白居易の詩文集には、その数度にわたる編集作業において、白居易自らが過去の作品を破棄していた痕跡がある。例えば、元和十年（八一五）の『詩集』十五巻から長慶四年（八二四）十二月の『白氏長慶集』五十巻までの間には、約百首程度の作品が破棄されている。詳しくは静永『白居易「諷諭詩」の研究』（注8所掲）その三〇二頁～三一五頁参照。

(17) この頃の白居易に関しては川合康三「長安に出てきた白居易―喧噪と閑適―」（同氏著『終南山の変容―中唐文学論集』所収、研文出版一九九九年）を参照した。

(18) 例えば前野直彬『中国小説史考』（秋山書店、一九七五年）、内山知也『隋唐小説研究』（木耳社、一九七七年）、近藤春雄『唐代小説の研究』（笠間書院、一九七八年）等を参照。

(19) 『大正新脩大藏經』第五十五巻（目録部）所収、大藏經番号二二六六（大正一切経刊行会、一九二八年）。筆者は以下の書籍を参照した。顧承甫・何泉達点校『入唐求法巡礼行記』（上海古籍出版社、一九八六年）、

(20) 深谷憲一訳『入唐求法巡礼行記』（中公文庫、一九九〇年）、エドウィン・O・ライシャワー原著／田村完誓訳『円仁唐代中国への旅―入唐求法巡礼行記の研究』（講談社学術文庫、一九九九年）。

(21) ちなみに『新唐書』藝文志（四）に見える「元白継和集一卷」は、あるいはこれと系統を同じくする詩集であったかもしれない。

(22) 吉野裕子『狐―陰陽五行と稲荷信仰』（法政大学出版局「ものと人間の文化史」シリーズ39、一九八〇年）

には、日本各地の狐に関する説話や伝承、および稲荷信仰のさまざまな諸相が分析されている。その中で吉野氏は我が国の「稲荷信仰」に、日本固有の要素と、中国から流入された要素（例えば陰陽五行説に基づくさまざまな祭礼行事）があることが指摘されている。

- (23) 「任氏行」に限らず、そもそも白居易の詩歌がなぜ平安時代の日本にかくも急速に受け入れられ、大流行し、そして日本の文化や美意識の基盤にまで深く滲透していったのか。その最も關鍵となる重要な位置に、この「任氏行（任氏怨歌行）」は存してはいないだろうか。このことは本稿一篇のみでは餘りにも荷の重い課題であるが、今はひとまず筆者の偽りない感想として、ここに提示しておきたい。

- (24) 静永『白居易「諷諭詩」の研究』（注8所掲）上篇第三章「県尉時代の白居易」参照。

- (25) 片桐洋一解説『和漢朗詠集・新撰朗詠集』（陽明叢書国書篇第七輯、思文閣出版、一九七八年）。

- (26) 源英明詩の他の聯は、現在『作文大体』に首聯および尾聯が残るのみ。頷聯の第三、四句部分を佚している。いま新聞一美『源氏物語と白居易の文学』（注9所掲）第二部「源氏物語と任氏の物語」二〇四頁に引用される本文に従って読み下す。

春雨洗花顔

春雨 花顔を洗ふ

春雨何因細脚頻 爲過花面洗紅塵

春雨 何に因りてか細脚頻なる、為に花面を過ぎりて紅塵を洗ふ。

□ □ □ □ □ □ □ □

（二句佚）

寫得楊妃湯後靨 模成任氏汗來唇

寫し得たり 楊妃 湯後の靨、模し成せり 任氏 汗の來の唇。

花情若聽吾微誨 莫恃妖姿妄折人

花の情 若し吾が微誨を聴かば、恃む莫れ 妖姿妄折の人を。

- 〔梗概〕春の小ぬか雨が頻りに降り続き、花びらの土埃はすっかり洗い清められた。……その美しさは浴を賜わりたる後の楊貴妃の頬に浮かぶえぐ、ぼのようであり、汗に濡れた任氏のくちびるのようである。花よ、心あらば我がひそやかな忠告を聴け。人の愛でるを喜ぶなかれ。人は外見こそ美しいが、花を見ればすぐさま手折ってしまう非情な輩なのだ。

- (27) 前注所掲の新聞氏の論考に拠れば、この源英明詩のほか、『新撰万葉集』および大江匡房「狐媚記」の存在が指摘されている。余田充「『任氏伝』の一受容形態——『新撰万葉集』上巻秋10の解——」（『四国女子大学紀』）

要』第一卷第二号、一九八二年）、小峯和明「大江匡房の狐媚記―漢文学と巷説のはざままで―」（中四国中世文学研究会『中世文学研究』第十一号、一九八五年）等を参照。

(28) 川端善明・荒木浩校注『古事談・続古事談』（新日本古典文学大系41、岩波書店、二〇〇五年）参照。なお

(29) 同書の荒木浩氏の解説に拠れば『続古事談』の作者は藤原定経（一一五八―一二三二）と考証されている。前掲注9に紹介する金子彦二郎『平安時代文学と白氏文集・千載佳句篇』、植木久行『千載佳句』所収白居易逸句考（上・下）である。

(30) 花房英樹『白氏文集の批判的研究』（注4所掲）所収「綜合作品表」参照。

(31) 白居易「元九に与ふる書」（『白氏文集』巻二十八、一四八六）に「今年の春（元和十年・八一五）、城南に遊びし時の如きは、足下（元稹）と馬上に相戯れ、因りて各々新艷の小律を誦し、他篇を雑へず。皇子陂より昭国里に帰るまで、迭吟遞唱し、声の絶えざること二十餘里。樊・李ら傍らに在るも、口を措く所無し。我を知る者は以て詩仙と為し、我を知らざる者は詩魔と為さん。」とある。

(32) なお、ここでは単に身体論的「記憶」だけを考えてはいけない。例えば宋代の類書『錦繡万花谷』や日本の各「朗詠集」の編集当時には、今日には伝わらない各種の「分門（部門別）詩歌集」や「秀句選集」のような小詩集が数多く存在したと思われる。かかる「紙の上の記憶」もまた重要な役割を果たしたと考えたい。例えば、宮内庁書陵部に蔵せる「伏見宮旧蔵『雜抄』」（平安後期の旧鈔本）や九州国立博物館所蔵の「唐詩殘篇」（八世紀の唐鈔本）などがそれに当たる。